

当院における薬剤コーティングバルーンの急性期及び慢性期の成績

【目的】ISR の治療に対し薬剤コーティングバルーン (DCB) を使用した症例の急性期及び慢性期の成績を光干渉断層法 (OFDI) を用いて評価した。【方法】2014 年 2 月より 2015 年 1 月までの期間に DCB を使用した 38 症例。男性 34 名、女性 4 名、平均年齢 70.6 ± 9.91 歳。OFDI を使用し、治療前後のプラークエリア (%PA)、初期獲得径 (Acute Gain) を計測し急性期の評価を行った。また 6 ヶ月 Follow Up まで終えた 22 症例のうち 10 症例では OFDI を用いて %PA を計測し、晚期損失 (Late loss) にて慢性期の評価を行った。【結果】急性期の評価として %PA は Pre で $78.3 \pm 8.2\%$ 、Post で $36.6 \pm 10.1\%$ 、また Acute Gain は 3.33 ± 1.49 平方ミリメートルという結果であった。また慢性期の評価として、22 症例中 4 症例が再々狭窄となり、標的病変再血行再建 (TLR) 率は 18.2% 、また Late loss は 1.15 ± 1.82 平方ミリメートルという結果であった。【結論】急性期において当院で目標としている %PA が 30% 近くまでエリアを獲得できており、TLR 率は 18.2% であった。当院での DCB の成績は良好であるといえる。Late loss が 1.15 ± 1.82 平方ミリメートルということを考慮すると、治療時に %PA を少なくし、Acute Gain を得ることが大事だと考えられる。